聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 97
2025年 7月

聖家族教会に設置された仮の教室。「学ぶ喜び」がやっと戻って来た。（ガザ）

6月24日、当NPOの現地スタッフ、ヤクーブ・ガザウィによる「緊急オンライン現地報告会」を開催しました。イランからのミサイル攻撃を受けるエルサレムの「ライブ」中継です。夜空を染めるミサイルの光やサイレンの音、アイアンドームによる迎撃で街に落ちてくるミサイルの残骸などの映像に、「戦時下に生きる」恐ろしさをかいま見ました。

今年もまた、平和を渇望するイスラエル・パレスチナの若者たちと、平和のために行動したいと願う日本の若者たちが、被爆80年の長崎に集います。イラン・イスラエル戦争の影響で空港も閉鎖され、一時はプロジェクト開催も危ぶまれましたがなんとか実施にこぎつけ、今はただ彼らが無事に来日できることを祈り、準備を進めています。二週間の共同生活で、互いを「友」として受け入れて初めて「真の平和の光」が見えてくる――たとえそれが小さな光であっても。

当NPOの「小さな平和の種まき」は今年、20年の節目を迎えます。皆様のこれまでのお力添えに心より感謝申し上げるとともに、今後も変わらぬご支援を、よろしくお願いいたします。

井上 弘子

認定NPO法人
聖地のこどもを支える会
事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502
Email ispalejpn@gmail.com
TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名「NPO法人 聖地のこどもを支える会」
当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。
https://seichi-no-kodomo.org

「平和」について考えることは大切 ――プロジェクト2025参加を前に

朴珠嬉（パク ジュヒ）（「平和の架け橋」プロジェクト2025参加者、早稲田大学生）

6月13日の未明にイスラエルによるイランへの攻撃が始まってから両国の応酬はやむ気配がなく、緊張は以前にも増して高まっています。イスラエルとイランの緊張、それに対する各国の首相のニュースを見ながら頭に浮かんだのは、ガザのことでした。ニュースでは、全面的な戦争まで一触即発という勢いのイランとイスラエルの攻撃が大々的に報道されています。ガザの人々の声を聴くのは、日本のメディアでは以前からも少なかったのに、今ではほとんどなくなった気がします。聞こえるのは、首相や大統領たちの拡散された大きな声です。ガザで爆撃におびえながら、今日の命をつなぐことさえおぼつかない人たちの声は、かき消されています。

ガザでは現在、国連に代わってアメリカとイスラエルが主導する「ガザ人道財団（GHF)」という団体が食糧など援助物資の配給を行っています。ただ、この財団に対しては問題もたくさん指摘されています。まずは、配給所がガザ南部のみに設置されていることです。この事実は、北部からパレスチナ人を南部に移動させ、その代わり北部地域への入植を進めようとしているとも指摘されています。「食」という、人間にとって絶対なくてはならないものが、政治・軍事的な目的に利用されているのです。

次に、イスラエル軍が、物資配給を待つパレスチナ人に向けて連日のように発砲していることです。イスラエルの人権団体 B’Tselem（ベツェレム）によると、6月17日には68人が、18日には31人が、19日には22人が物資配給センターで殺されました。彼らは、一体何をしたのでしょうか？飢餓にあえぐ中で「食べたい」というのはどんな罪なのでしょうか。

今年3月、生まれて初めて広島に行きました。原爆資料館や平和記念公園に赴き、小学生の時に被爆した、被爆者の女性の話も聞きました。水が欲しいと言いながら息絶えた女子生徒、校庭に積みあがった女学校の友達の亡骸を自らの手で焼いたこと…。ボタン一つで何十万もの人の命を奪った核兵器の恐ろしさを感じました。そして戦争はその一瞬ではなく、終わった後でさえも人間や土地に、何世代にもわたって消えない痕を残すと思いました。

イスラエルは、核兵器の不拡散や核兵器保有国を定め、核軍縮をうたうNPTに加盟しておらず、また現在中東で唯一核兵器を保有している国です。イランは核兵器の製造能力を持ちますが、NPTに加盟しており核兵器を保有していません。しかし、数日前のニュースではイランがNPTから脱退する法案を国会で準備中だと報道されました。

日本では戦争は起きていませんが、世界のさまざまな地域では今も戦争により多くの命が失われています。私が広島を訪れた際、戦争とは人の命を奪うこと以外の何ものでもないのだと、強く感じました。ニュースを見ていると、戦争で友人や大切な人を失った人々の姿が映し出され、その痛みに胸が締めつけられます。

そんな時だからこそ、今「平和」について考えることがとても大切だと思います。戦後80年を迎える今年、私は8月に、イスラエルとパレスチナの若者たちとともに、被爆地・長崎で平和について考える「平和の架け橋」プロジェクトに参加します。参加者一人ひとりの声に真摯に耳を傾け、ともに平和を見つめ直す時間にしたいと思っています。

プロジェクト2025 参加者の横顔

ガザの人道危機、イスラエル・パレスチナ間の緊張が続く中、それでも「聖地のこどもを支える会」は「平和の架け橋」プロジェクトを、今夏も長崎と東京で実施する。参加者はイスラエル側からアラブ系１人を含む４人、パレスチナ側からは３人。日本から４人。

対話を求めるプロジェクトへの参加を求めてきただけに、いずれも「相手側」を敵視する感情はない。イスラエル人の１人は「ガザ住民が苦しんでいるという認識を示すことさえ、ユダヤ人に対する裏切りだと見なされることに胸が痛む」と述べる。過去に参加経験があるパレスチナ人女性は「周囲に闇が広がっている今、もう一度希望を見出したくて」再度応募した。前回の参加で得られた「対話し心を開く」という体験をまた芽生えさせたい」という思いからだ。

一方、イスラエル、パレスチナ双方で「共に立ち上がろう」という名の平和活動に加わる若者たちがいる。異なる背景を持つ人々が直接交流する機会となるこのプロジェクトに期待を寄せての参加だ。

戦争をなくすよりも大切なこと

中山喜祈（よしき）（「平和の架け橋」プロジェクト2024参加者、中学2年）

6月に勃発したイランとイスラエルのミサイル交戦。緊迫した12日間、世界は戦火のさらなる拡大を恐れ、息をのみました。両国は一時的に停戦に合意したものの、中東情勢の先行きは依然として不透明です。

そんな中、昨年「平和の架け橋」プロジェクトに参加した、当時13歳の中山喜祈くんの文章をご紹介します。今を生きる子どもたちの中に、彼のような視点を持つ人が増えていくことを願っています。

戦争をなくすよりも大切なこと
中山喜祈

去年の夏、「認定 NPO 法人聖地の子どもを支える会」主催の「平和の架け橋プロジェクト」に参加しました。このプロジェクトは、現在紛争を繰り返しているイスラエルとパレスチナの両国から若者たちを日本に呼び、寝食を共にして、友情を築いて平和を「作る」というものです。

さて、僕は、未来の平和のためにできることはたくさんあると思いますが、このプロジェクトは、その第一歩だと確信しました。平和を実現するために、また、未来に続けていくためには、「戦争をなくす」ということも確かに大切です。戦争の中には平和はないからです。しかし、一時的に戦争を停止しても、またいつ再勃発するか分かりません。戦争を「なくす」ことは不可能に近いと思います。

だから、このプロジェクトは「戦争をなくす」ためのものではなく、「平和を作る」ためのものなのです。では、具体的にどうすれば平和を作ることができるのでしょうか？イスラエル・パレスチナの戦争だけではなく、今世界的に戦争が起こっています。僕は、平和を作るために未来に向けてできることはただ一つ、「敵国の人々と友情を築くこと」だと思っています。自分の国が今、戦争をしていると思ってください。イスラエルとパレスチナの間には、大きな壁があります。彼らは、相手の国と戦っている認識はあっても、相手の顔も、表情も、声も聴けない状況です。「相手は敵だ。」それだけです。

プロジェクトでは、イスラエル、パレスチナ、日本の若者が集まり、日本のいろいろな場所を回り、たわいもない話をし、平和について考え、自分の体験を話し、祈り、願う。そんな中で、今まで「敵だ」と思っていた相手のことを、いつの間にか、「友達」とし

▲「平和の架け橋」プロジェクト2024の一コマ。長崎で「核廃絶のための平和活動」をする高校生グループを訪ねた。最前列中央が中山喜祈。

してみることになるのです。今まで壁で隠されていた人たちの顔が見え、敵だと思っていた人たちと寝食を共にし、友達になり、そして、今まで自分を苦しめると思っていた人たちも実は、自分たち以上に苦しんでいたという体験を聞き、だんだん相手に打ち解けてゆきます。敵と敵の間に「友情」が生まれます。そこから「平和」は始まります。相手を理解するところから、相手を友達としてみるところから、相手の話を聞くところから。平和を築くために、闇を打ち払うよりも、光をともす必要があるのです。戦争をなくすよりも、相手をまず理解しなければなりません。敵を敵としてみないところからすべてが始まります。

まず、この単純なことを理解しない限り、何も始まりません。未来に何ができるか、未来のために平和を、永遠の平和を残すために、相手のことをよく知りもしないで思い込みで行動したり、苦しいのは自分だけだと思い込んだり、相手は敵だと決めつけたり、その考えを固めてしまえば、たとえ戦争がなくなっても、平和は訪れません。それができてこそ、戦争をなくせると思うのです。

イヤールさんとサレムさん――南ヘブロンで共に活動するユダヤ人とパレスチナ人

森佑一（ドキュメンタリー写真家）

2023年10月7日以降、イスラエルとパレスチナの対立や分断が先鋭化しています。今年6月にはイスラエルがイランへ大規模ミサイル攻撃を行い、それに対する報復としてイランはイスラエルへ大規模なミサイル攻撃を行うなど戦争が拡大しています。現状、日を追うごとに和平から遠ざかっており「共存」という言葉が絵空事に感じられる様な状況です。イスラエル市民の被害や人質問題。イスラエル軍のガザ地区への軍事侵攻やヨルダン川西岸地区におけるユダヤ人入植者の暴力などによる入植被害。イスラエルが建国された1948年以降、何十年にも渡り彼の地で暴力が再生産され、国際社会においても親パレスチナと親イスラエルに分かれて互いへの憎悪を深めています。

そうした二極化した状況であるからこそ、自分自身、敢えて日本人という「第三者」の視点で中立的にイスラエルとパレスチナ双方に足を運び、そこで暮らす人々に直接会って実情を見聞きしています。現地の様々な立場の人々と関わる中で、パレスチナ人だけでなくイスラエル人の友人も多くでき、親パレスチナや親イスラエルという枠組みにとらわれずに活動する様になりました。

今回、現地取材の中で知り合ったユダヤ人のイヤールさんとパレスチナ人のサレムさんを紹介したいと思います。彼らと知り合うきっかけとなったのは、2024年1月に訪れたヨルダン川西岸地区の南ヘブロン。そこはイスラエル軍が治安と自治を管轄するエリアCと呼ばれ、入植被害が深刻な地域でした。そこでパレスチナ人支援に奔走するユダヤ人の若者達に会い、両者の融和的な関わりあいを目の当たりにして、今年再び現地に足を運びたいと思いました。

イヤールさんとは、国際協力アドバイザーの佐藤真紀さんの紹介で知り合いました。イヤールさんはイスラエル南部を拠点に個人でパレスチナ人支援を行なっており、南ヘブロンへも足繁く通っていました。そこで彼の南ヘブロンでの活動に同行したいと思ったわけです。ちなみに彼はマインドフル瞑想の講師でもあります。

そうして今年1月後半、イヤールさんと共に南ヘブロンを再訪することになりました。そこで知り合ったのがパレスチナ人のサレムさんでした。彼は、南ヘブロンが舞台のドキュメンタリー映画「ノーアザーランド」に出てくる主人公バーセルさんの兄でした。

▲ パレスチナ人のサレムさん(左) とユダヤ人のイヤールさん(右)。彼らは数年来の付き合いで、イヤールさんが南ヘブロンで活動する際にサレムさんがガイド役を担っている（2025 年 1 月、ヨルダン川西岸地区・南ヘブロン）

サレムさんは日々南ヘブロン各地で発生する入植被害についてSNSなどで発信する傍ら、イスラエルや海外からやってくる活動家やボランティア、ジャーナリストの通訳やガイドなども行っています。

10月7日以降、南ヘブロンでは過激なイスラエル人入植者による現地パレスチナ人へのありとあらゆる嫌がらせや暴力が激化しています。家屋の破壊、オリーブの木の伐採、暴行や恫喝などの被害が南ヘブロンに点在する集落で日常的に発生しています。そして加害者であるはずの入植者は放免となり、逆に被害に遭ったパレスチナ人が逮捕されてしまう理不尽な状況でした。

そうした被害に遭い、厳しい生活を余儀なくされているパレスチナ人に対し、イヤールさんは彼の考えに賛同する友人達と共に活動を行っています。主に個人で運営するクラウドファンディングサイトで活動資金を集め、それを元に現地の人々が必要としている支援物資を購入し、それらを車に積み込み、定期的にサレムさんの案内の元、各地のパレスチナ人家庭に届けています。

しかし、現在入植被害が拡大している中で支援が十分できない状況に陥っています。入植被害を記録する為のカメラや南ヘブロンの荒野を走破するための車、羊の餌や植物の苗など活動のために様々な物資を必要としています。

さらに、彼ら自身もイスラエルやパレスチナ、イランなどを取り巻く終わらない暴力に疲弊しています。そんな彼ら物心両面で少しでもサポートできればと自分自身もクラウドファンディングを計画しているところです。

イヤールさんHP：https://en.peacebearer.net/

軍事力がものをいう状況、置き去りにされるガザ

村上宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

イスラエルがついにイランを攻撃しました。イランの核施設を破壊し、核兵器開発を阻止するためだとしています。イランはミサイルなどによる報復攻撃をしましたが、この戦争に米国も加わり、イランの核施設を「完全に破壊した」としています。軍事力にものを言わせ、米国にも支えられて思うがままに自国に有利な環境づくりを進めようとするイスラエル。新たな戦争が注目を集める陰で、ガザの人道状況は悪化するばかりです。イスラエルとイランの停戦が実現しましたが、今後どう動くかわかりません。この原稿が読者の皆さまに届くころには、新たな展開があるかもしれないとお断りしたうえで、ここまで何が起きてきたのかを追ってみます。

好機到来とイラン攻撃強行

イスラエルのイラン攻撃は、これまでも度々話題に上ってきました。イスラエル、特にネタニヤフ首相は、イランの核開発は核兵器保有につながり自国を危うくするとして、核開発施設攻撃の意思を隠しませんでした。イスラエルの兵力を支える米国は抑えてきましたが、この間イスラエルは核開発にかかわるイランの科学者を暗殺したり、核施設を部分的に破壊したりと、妨害工作を実行する能力を示していました。

一期目でイスラエル支持一辺倒ぶりを見せた米トランプ大統領は、イランの核兵器開発を封じる核協議の妨げになるとして、イスラエルに対し当面はイラン攻撃をしないよう慎重な姿勢を示していたと報じられていました。しかしイスラエルは、今がイランを攻撃する好機と見て、トランプ大統領の意向に従わずに攻撃に踏み切りました。「好機」と見たのは、軍事的に有利な状況になったからです。

まず、イランの支援を受けて軍事力を備え、イスラエル包囲網を形成していた組織が無力化、弱体化しました。南のパレスチナ自治区ガザのイスラム組織ハマスは、殲滅されてはいないものの、人質を盾に抵抗し続けるのがやっと。ロケット弾で大規模なイスラエル攻撃を仕掛けるような力はありません。北のレバノンで手ごわい軍事力を持っていたイスラム教シーア派組織ヒズボラも、イスラエルにより最高指導者を暗殺されたり、携帯の通信機器を爆発させる工作で連絡網を混乱させられたりして、すっかり弱体化しました。さらに、親イランだったシリアのアサド政権が昨年12月に崩壊しました。イランはシリア国内に軍事活動拠点を設け、戦闘員を置くほかヒズボラなどへの兵器の供給ルートにしていました。その拠点を失ったわけです。

一方、昨年7月末、ハマスの最高幹部ハニヤ氏がイランの首都テヘランの滞在先で、イスラエルのミサイル攻撃により殺害されたことへの報復としてイランは10月、イスラエルをミサイルで攻撃。これに対しイスラエルはイランへの大規模な空爆で、防空システムなどを破壊、ミサイル拠点にも打撃を与えたとしています。こうしてイラン上空の制空権を握り、イランを攻撃した際に周辺の反イスラエル勢力が攻撃してくる可能性をほぼ封じ込めた今だから、大規模な反撃を心配せずにイラン攻撃ができると判断したようです。

これに対し慎重姿勢であったように見えたトランプ大統領ですが、イランに対しては「今ディールに応じなければすべてを失う」という趣旨の発言をしていました。「核協議で私のいうことを聞いて、核兵器開発につながることはやめないとひどい目に合うぞ」と、イスラエルの軍事力、さらには米軍による攻撃にも含みを持たせて脅しをかけたのでした。

イスラエルはイランの最高指導者ハメネイ師の殺害を狙い、トランプ氏はこれを阻止したということが報じられました。ロイター通信によると、イスラエル側からハメネイ師殺害の機会があると伝えてきたのに対し、米側はこれを却下したといいます。しかし、「今のところ」排除（殺害）するつもりはないという判断だというのです。一国の指導者の殺害を、敵対しているとはいえ大統領や首相という立場の人が平気で論じるとは。

このような報道の直後の6月21日、トランプ大統領はイランの核施設3カ所を米空軍機が攻撃、施設を「消し去ってしまう」大成果を上げたと表明しました。地下深くにあってイスラエル軍でも破壊が困難といわれたフォルドゥ核施設に対しては、米軍しか持っていないバンカーバスターという特殊爆弾を使用したとのことです（その後の調査では、核開発を数カ月遅らせる効果しかなかったという見方もあるようです）。イラン側は、攻撃されれば対米報復を宣言していましたが、米側には、先に述べたイスラエルによるイランの反撃力削減で報復は恐れるに

足らずと読んだのでしょう。

死者は増え行き渡らぬ支援

では、ガザはどうなっているのか。今年1月に米大統領に返り咲いたトランプ氏は就任早々に、ほぼすべての対外援助を凍結し、ガザ住民の暮らしを大きく支えてきた国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）への支援も打ち切られました。これと並行してイスラエルは、国内での国連の活動を禁止する法律を施行、ガザへの支援物資の調達などに支障が出ています。それだけでなく、イスラエルは3月以降、ハマスに圧力をかける狙いで、国連やNGOによる人道物資の搬入を2カ月半にわたって停止しました。イスラエル側は他の機関と協力するので物資搬入に支障はないとしていましたが、米国主導で設立された「ガザ人道財団」（GHF）という団体が設置した配給拠点は4カ所のみ。国連の配給拠点が400カ所あったのとはくらべものになりません。イスラエル軍が治安維持に当たっているのですが、食料を求めて集まった群衆が攻撃されて多くの死傷者が出ており、命がけでやって来て食料を得られる保証もなく、GHFの活動は支援とは呼べないと批判されています。

ガザの保健当局によると、2023年10月以来の戦争によるパレスチナ人の死者は、この6月中旬までで5万6千人を超えたといいます。現在のイランとの交戦の中で、イスラエル側はイランによるミサイル攻撃で少なくとも24人が死亡したとし、イランは民間人を標的にしたと非難しています。イスラエルは武力行使の際、戦闘員やその指導者などを狙ったもので、民間人を標的にしてはいないという立場をとっています。

◇

イスラエルの平和活動家で文化人類学者のジェフ・ハーパーという人にインタビューした5月4日の朝日新聞ウェブ版の記事を一部引用させてもらいます（聞き手・其山史晃記者）。

――イスラエルはガザの作戦で、国際人道法の原則を順守していると主張しています。その一つは、攻撃の際の戦闘員と民間人の「区別」ですが、守られていますか。

▶国際人道法では、民間人を狙った攻撃は禁止されています。イスラエルは、攻撃の対象は合法的な軍事目標のみであり、民間人は攻撃しないと主張していますが、敵対者を「テロリスト」と「テロリストを支援する民間人」というカテゴリーでくくっています。いずれも国際人道法にないものです。「テロリストを支援する民間人」は、たとえ戦場で戦闘に参加していなくても「事実上の戦闘員」と見なされるため、ガザのほとんどの住民は、幼い子供たちを除いて、合法的な攻撃対象と見なされる可能性がある。今のイスラエルでよく耳にする「ガザの住民はみんな（イスラム組織）ハマスのメンバーだ」という考え方が、この違法な政策を正当化しているのです。

――最近のイスラエルの世論調査では、7割近くの市民がガザでの戦闘終結を望んでいます。パレスチナ人の犠牲者の多さが、市民感情に変化をもたらしていませんか。

▶多数のイスラエル市民は戦争を止めたいと考えていますが、それはハマスにとられているイスラエル側の人質を取り戻すためです。人質を奪還すれば、後はガザで何をしても構わないという考え方です。ガザの破壊の様子を現地から伝える（中東の衛星放送局）アルジャジーラがイスラエルでの放送を停止されているように、イスラエル人の多くはガザの実情を目にしません。世界がジェノサイド（集団殺害）とみなすものにも関心はありません。

――国際人道法は、攻撃の際に軍事目標と住宅やインフラのような民用物を区別するように定めていますが、イスラエル軍の作戦現場ではガザを含め、地域全体が破壊された場所もあります。何が狙いなのでしょうか。

▶イスラエル軍は、「不均衡な戦力」を行使することを戦略の中心に据えています。これは、敵に比べて圧倒的に強力な攻撃を加えることで、「テロリスト」とその武器、インフラ、資金の流れなどに可能な限りの損害を与え、住民を屈服させることを目的としたものです。軍事だけでなく、社会の支援基盤も破壊することで敵を消耗させ、抑止する効果を狙っています。民間人や民間施設への甚大な被害を前提としているわけですから、国際法に違反しているはずですが、イスラエルは気にしません。国際法違反と批判されたところで、誰もその違反に対する

罰を強制できないと知っているからです。

国際社会の批判の目そらす

7年前、地球温暖化への危機感から気候変動対策を強く訴えて有名になったスウェーデン女性グレタさん（22）が、この6月1日、ガザ支援のための粉ミルクや医薬品を積み込んだ船に乗り、イタリア南部のシチリアを出発しました。10日後、船はイスラエル側に拿捕されて彼女はフランスへ送られました。ガザ沿岸はイスラエル海軍によって封鎖され、到達することはしょせん無理な話でしたが、グレタさんは「確率がどうであれ、トライし続ける必要がある」「世界の状況を見れば、すべてが無駄に感じてしまうけれど、できる限りのことをトライしなくなれば、希望を失ってしまう」と述べています。

この少し前、5月26日にドイツのメルツ首相がベルリンで「イスラエル軍がガザで今していることは何が目的なのか、もはや理解できない」と発言しました。ドイツは第2次世界大戦時のナチスによるユダヤ人虐殺への贖罪意識から、イスラエル支持は国是ともいえ、高額の賠償金を払い続け、イスラエル国内でひっそりと支援活動を続けています。首相によるイスラエル非難は異例のことです。ハマスによる攻撃以来、ガザ戦争についてイスラエル支持を貫いてきたフランスのマクロン大統領も5月30日、シンガポールで開かれたアジア安全保障会議での発言で、ガザの人道危機をめぐりイスラエルを批判。英国のスターマー首相も6月4日、英国議会下院で「最近のガザにおけるイスラエルの行動はぞっとするものであり、許容できない」と発言しました。

こうした動きの中、6月17日からニューヨークで開かれる予定だったパレスチナ国家の承認、二国家和平案を話し合う国際会議が延期されました。2024年12月の国連総会で開催が決まっていたものですが、イスラエルとイランの軍事衝突で安全面など開催の条件に不安があるからという理由でした。

イスラエルに対する批判的な見方が広がり、報道でも目立つようになっていたところへ6月13日のイスラエルによるイラン攻撃。世界の目は一斉にこちらへ向けられるようになりました。パレスチナ国家承認をめぐる会議の延期は象徴的なもので、ガザのことも忘れられたかのようです。ドイツのメルツ首相は17日、イスラエルは「我々のために汚れ仕事をしている」と述べてイラン攻撃を支持する発言をしました。イランが核兵器を開発するのを阻止しなければならないのを、イスラエルがやってくれたという意味です。20日余り前に、イスラエルがガザでやっていることを「理解できない」と批判したことの埋め合わせをしたかのようです。

昔から、戦争など対外的な問題によって人々の目を外に向け、国内の問題から目をそらさせるというのはよくある手法でした。現に、イスラエル国民の75％がイラン攻撃を支持という世論調査結果が報じられ、ネタニヤフ首相への支持率も上がっているとのことです。イランからの報復攻撃もあって、ネタニヤフ政権に対する批判どころではないでしょう。問題は、イスラエル世論の動向よりも、ガザの人道危機を招いているイスラエルの軍事行動に対する国際的な批判の目までそらされてしまったことです。

著書の中で
当NPOの活動が紹介されています

毎日新聞編集委員・大治朋子著

「イスラエル人」の世界観

定価1980円（税込・電子書籍も同じ）

著者は、2013年にエルサレム支局長として赴任、さらに17～19年にテルアビブ大学大学院などで研究……という6年半のイスラエル生活。その中で、「イスラエルのユダヤ人は隣人であるパレスチナ市民が苦境にあえいでいるというのに、なぜあれほど無頓着でいられるのか」「彼らはいったい、どのような世界観の中に生きているのか」という疑問を抱き、歴史的経緯から紡ぎ出されるイスラエルの「光」と「闇」の世界を描いたのが本書です。

「紛争解決に向けた草の根の取り組み」を取り上げた章の中で、イスラエル・パレスチナ双方の若者を日本で交流させる「聖地のこどもを支える会」の活動を紹介してくれています。

皆様のご支援がつなぐ命

▼ 当NPOの支援金送付先であるエルサレム大主教区では、多くの国際支援をもとに【配給センター】を立ち上げました。聖家族教会やその周辺に避難する人々の命を守る砦となっています。

空爆の被害を視察するエルサレム大主教区・ピッツァバッラ枢機卿。▶

忙しい奉仕作業にも笑顔が絶えないシスターたち。▶

共に活動するユダヤ人とパレスチナ人

（2025年1、2月、ヨルダン川西岸地区・南ヘブロン、
報告：森佑一氏、p4に記事）

▲ パレスチナ人宅を回って支援物資を渡す。イヤールさんは彼の活動に賛同する友人達と共に、南ヘブロンで入植被害に遭ったパレスチナ人への支援活動を行っています。

▲ パレスチナ人宅で生活状況を聞くイヤールさんとサレムさん。イヤールさんはユダヤ人ですが流暢なアラビア語で現地の人々とコミュニケーションをとります。

▲ サレムさんとイヤールさんの活動仲間。それぞれが自身の仕事を持ちながら合間に支援活動を行っています。

灯火の消えた教会で

▲ 電気が来ない教会、懐中電灯やランプの光で礼拝が行われます。

写真撮影 ： 森佑一、エルサレム大主教区